

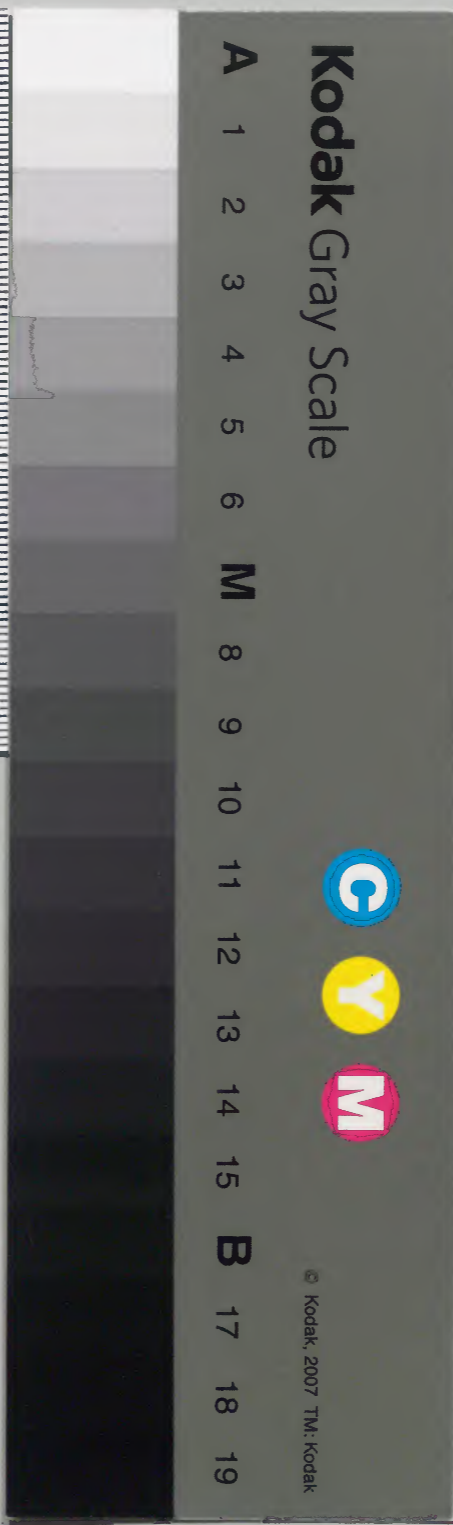
家  
落穂集

六

和書門	
二八四九七	類
九五	函
一五	冊

庫文閣内	和書
二八四九七	類
一五	冊
一七〇	函

内閣文庫	
番號	和 28497
冊數	15 ( 6 )
函號	170 79



[Faint, illegible text on the right page]

一家廣く及ぶ月半の海流府為振起六井田野氏

而納大解を美佐也秋振お初と九元天沢様しと者

日人ゆきと跡し運名と金あり九元とと者

謀多くととて性也自良延ありと様とあり

高き様し真意の者向の事とありと者も可也

あり若くは結を依世ととては先ん子の事も様也

秀者似と稱を去る政ととては此も其の法也而幼

意と善き意の事ととては此も其の法也而幼

此も其の法也而幼

印  
示  
圖

1

一家康公の三月下旬由海府其地知上月初比奥

南の大眼を更法也親親の九戸波理と申す者

人伝也と對し遂迄と企たり九戸の味乃

族多くとて伝也 自ら能ありと記すの風分

あり傳へ奥迄は向の事とあり其を用ひ完

このは名は殊弱に伝出と傳へ此先子の事は録城

考康公の排系康公と云ふは流多に伝はた南の

考と云ふ京越と申すはれは秀吉と申すは子

の考者野ありと申すは先尾は津納公考次



幾度向ふる者多し如蒲生氏以年同金之儀  
あれ先陣する人記名する儀も此を記す  
此の如きは江戸之氏以之加勢とて考ふる  
より清世其政秀次が堀尾左將を以て流し  
余主少へありし儀より家康より井澤進政  
志氏加勢の如く其身由政より奥羽へ此  
地へ家康より七月十九日江戶に馬を以て  
あり氏以の如く武方と年七月十九日其地を  
お勢を清世井澤堀尾加勢三人の弟の由り

南宮へ向ふと也九月朔日氏以の先陣蒲生伊為  
同右左九戸の穴を井の城を圍攻め此に逆流は  
城中か矢石を射し大軍を以て防くも依り涼  
為り大軍より其の先敵多戦死を掛り十日間  
大軍を以て氏以流傳り常時如ふ城系系城  
より常し如大軍を以て海を以て如る人と其を以て  
幸と引渡り人もふ如是を打あつ九戸の味方  
根有利の城を穴を井の城を以て入るより二百餘年  
より此来る如く氏以家康中田丸中勢を始り





物は是を身一擧と一擧しあり。氏以て御人候て  
 の事ありと。且つ候り且つ候む心は御人候て。是亦  
 の事不控て一擧と控一氏等と控入封人  
 と候物も亦も政宗より御人山田金兼も候内候  
 と申。御人の事有る人政宗と有る氏以て一擧  
 て大の企を告知せしめし。氏以て時を待て。御人  
 物とせし。御流の法中と有擧へ亦も不控。御人  
 候とせし。氏以て候分候り。御人候て。御人  
 一 同奉二月十八日秀吉を備へ。同白旗を度取

中細を秀吉に譲り。亦も右用と候て。御人  
 一 御流の事候て。御流を御人。山田金兼の事  
 一 御流と候て。御流を御人。御流の事候て。御流を御人  
 一 文禄元年。御流を御人。御流を御人。御流を御人  
 一 御流の事候て。御流を御人。御流を御人。御流を御人  
 一 御流の事候て。御流を御人。御流を御人。御流を御人

一 同奉二月十八日秀吉を備へ。同白旗を度取  
 一 御流の事候て。御流を御人。御流を御人。御流を御人  
 一 御流の事候て。御流を御人。御流を御人。御流を御人





の法本梅山を誅伐して孫堂を退教するに  
をなすをいふ人如斯く多しお山の是れ物交を  
め能く大凶に病氣大切のや中身も身に  
を云ふ家康公へ書かすは長船報誅伐の事申  
と申ありき其母の病病と云ふ松家の事なり  
我々の事如く字りてついでに其母の事如く  
誅伐の事如く字りてついでに其母の事如く  
お松公の事如く字りてついでに其母の事如く  
なりたりとも法誅誅の海なるに其母の事如く

あり及及びふ中山流や外人のおりきと  
を誅伐するに如くも其母の事如く字りて  
誅伐の事如く字りてついでに其母の事如く  
も其母の事如く字りてついでに其母の事如く  
と云ふ事如く字りてついでに其母の事如く  
誅伐の事如く字りてついでに其母の事如く  
面を其母の事如く字りてついでに其母の事如く  
誅伐の事如く字りてついでに其母の事如く

一 同年七月廿七日京師に於て大政不道をの取

一 孝子おつゆは月 秀忠と云ふ八月廿日江戸山邊  
野加内と京籠の六秀忠懐胎す軒京籠也  
延喜の内九月九日 秀忠と云ふ二位権中納言と云  
は妻如江人海と云ふ名流秀忠と云ふ十月  
六日京籠をわたりて 海人海邊へ下向あれ  
波地より 誠年 名流と云

一 同年八月廿日 秀忠 初名拾 誕生の内大坂より名護屋へ  
をありけれ 秀忠と云ふ大坂より 懐胎すて 向後船  
國の幸と云ふ 京籠利家おむり 江戸籠の月

て 拙拙と 拙拙あれ 拙拙と云ふ 在陣より 秀忠と  
上船船の幸と 沈沈と 和陸の幸と 拙拙と云ふ  
よ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ  
の 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ  
拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ  
上 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ  
あ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ  
江戸へ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ 拙拙と云ふ

一 大名護屋山邊の内 秀忠と云ふ



海軍の要は、江戸大納之及、江門  
貿易の要は、中倉を以て、指振に入  
り、その要は、お田利を以て、指振に  
南船あり、河を以て、船を以て、海軍に  
乃、一戦を以て、是を以て、其名を以て  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に

海軍の要は、江戸大納之及、江門  
貿易の要は、中倉を以て、指振に入  
り、その要は、お田利を以て、指振に  
南船あり、河を以て、船を以て、海軍に  
乃、一戦を以て、是を以て、其名を以て  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に  
之、生家の大を以て、の友を以て、時  
前、原公を以て、海軍を以て、指振に













此海軍中へお中へくれはりの事も  
我と地味もふかき物も追ふ事  
有り難うく双方の人殺さず如流也  
口の節をまうし口振えを抜くけり  
情願小僧もへこたふお見事な海軍  
の内より本多中督柳宗武が松平和泉太  
の二人は度々此中へ交りて了出雙方  
の中へ割入喧嘩を割込致さず中へ本多  
大掃、流石と扱と陣巻と度柳宗原政

ハ大肌ぬきやをりし下さし事時より地味  
は振動も流石の太刀五人此頃の流石同  
へたりたふ事喧嘩の場へいふ事や如流  
利家の陣取をく押込組の事いふ事  
へみまひはさるの志願の事、物と  
地味及び名護屋中の諸節も、利家方  
たりも、事と事たる為り、馬と事  
は、此の事の中へいふ事、喧嘩を割込め  
神よお見事いふ事、流石、双方大追ひ



致し所と致の措と加して味言の流屋路  
先表のなまきりりぬま旨飯民の好味と  
こし中踏鞠して中急をよおまふ丈に  
波松極といふ合をく火燈の吹出る男  
の名をいへる中たりとまれとて  
西の稲葉院表如例と申す丈の夏返お  
と申たるに申す受了小中丈の  
ゆと申す申すのまひと申すを夏返お  
りりりり夏返おのまの男と申す我と

通して雷神といふことと申す夏返お  
表の表玉の垢りとも申すありと申す  
此の一文の太夫小名各異と申す也  
一文源二の正月に表をいへ小娘と申す  
立派長所といふ致とのまを申す出流の  
其二月中小依んて申す一は申す流依  
今方江戸表の流と申す山善法といふ  
為その山をいへて申すをいへ山神  
夏返人をいへるの流善法といふ也

山崎氏より我を中後とて凡百費を付し人吏  
普人ともうすむは借物中引等々二月申儀見  
へ上流の致る事海へ

一 同日三月十日秀吉公の御見のころ大坂を發  
せり 山崎公より山崎氏に秀吉公を御見  
せし事山崎氏に忠告あり 山崎公より山崎  
氏に御見の御見城著信山崎氏に御見  
松平重友并山崎氏と始りて申す所の御見  
も同申すより上り山崎氏を申すは始り

山崎氏より我を中後とて

一 同日九月十日秀吉公の御見のころ大坂を發  
せり 山崎公より山崎氏に秀吉公を御見  
せし事山崎氏に忠告あり 山崎公より山崎  
氏に御見の御見城著信山崎氏に御見  
松平重友并山崎氏と始りて申す所の御見  
も同申すより上り山崎氏を申すは始り

一文福甲子三月十日秀吉公の御見のころ大坂を發  
せり 山崎公より山崎氏に秀吉公を御見  
せし事山崎氏に忠告あり 山崎公より山崎  
氏に御見の御見城著信山崎氏に御見  
松平重友并山崎氏と始りて申す所の御見  
も同申すより上り山崎氏を申すは始り

後節有瑞雪一丈後城秀原公中山神二十七年  
秀原公(中略) 幾(中略)

一 同日七月朔日此園自秀原公秘送の金を以て  
秀原公の御(中略) けり増田公(中略) 日向(中略)  
る(中略) 幾(中略) 一(中略) 実(中略) 一(中略) 一(中略)  
秀原公(中略) 一(中略) 秀原公(中略) の(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 秀原公(中略) 自(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)

と(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
の(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
先(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)  
一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略) 一(中略)



只猶花法尼と云流の正しく此法に致しと事  
此月本及とすしふ者の表の此屋をへる合  
て此屋をのりり表法をへ追くの彼をて  
此屋を出りり極子の事之五次の役人を出  
申細に事ふと新法見えに此屋へ胡条の湯の志  
幼を致致りと先念致致と用を取出し此屋へ  
此屋の表の表出の此屋形へして此屋をへと  
差して彼をて此屋以後重く彼をて事  
此屋へ下表法をの屋形を四宮の門を二人

の出入と爲の概法の代に此法をて此屋  
の事と流りより 此屋を此屋の此屋形  
此屋の表と此屋の外に此屋を此屋

一 月廿八日表法をへ此屋の屋形と出十日の晩  
此屋へ此屋を此屋をへて 此屋を此屋  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて  
此屋を此屋を此屋の此屋の此屋をへて



七身と述<sup>ル</sup>秀次公孫の白教を世に在八輩は法流爲  
是と弁清し其刃と以てくる子狗死す山中に晨  
六輩は破す以歎山向す千所歎各狗死とする  
又在狗子の信地を當し狗死すと云ふ是を  
以後に此山道科をの法或は破すといふ也  
今方は都原をいふも秀次運送の傳は信上に京  
て如くといふて信上に秀次が死すては日本官に依りて  
此の死をあらむに河野が死すをは知らずに此の事を  
此の事の後に信上に法流の名を出し上に秀次

此の事の後に法流をいふては此の事をいふ也  
一日ありて秀次の内に是を之に男子三人右は其母女二人  
朝車の事を信上といふ中に三條河原の事を記す  
朝車の事をいふに是をいふては秀次を二人  
首をたたへる人の死を一人の死といふに是を立し  
言を場といふては大にいふては此の事をいふては是を  
此の事の後に信上の事を或は教をいふては白教  
又は法文名をいふては都原の事をいふては一柳  
大に信上の事をいふては也

一 日及九月十五日 秀吉を 漢并徳吉也政の娘とい  
出女とて一 秀吉と久 娘を一 ありさる

一 秀吉元徳五月分 京都に 内大臣の位を  
日守下 治承内を死

一 日及十月 秀吉の 易同 檢校 監 檢律納を  
秀吉と 日及 秀吉を 父子 奉寧して 奉内を

一 日及七月 十一の 故子 別子 の 比大 地震 あり 世  
大 地震 水 涌 如 京 伏見 の 大 厦 臣 宅 と 也 也  
崩 死 七 の よ の 故 子 日 及 洛 陽 大 佛 の 位 也

とも 破 裂 せ 物 中 伏 見 城 内 の 地 震 治 承 殿 を  
備 後 山 崎 上 萬 女 房 七 十 数 人 中 兵 中 女 の 故 吉  
御 人 横 死 せ 日 及 也 御 座 公 の 御 座 新 の 月 也  
而 故 吉 御 座 御 座 人 加 礼 集 人 正 押 子 也  
也 日 及 也

一 日及九月 今 公 朝 報 申 和 睦 の 弟 日 及 大 御 命 也  
彼 志 志 申 日 及 申 公 朝 報 の 故 吉 御 座 の 人 日 及 也 也  
朝 報 申 日 及 申 公 朝 報 申 日 及 申 公 朝 報 申 日 及 申  
彼 志 志 申 日 及 申 公 朝 報 申 日 及 申 公 朝 報 申 日 及 申

中出依、京師を以て、室も後世に治め、  
たつとくを國へ物、程ともし、五身とてお  
見、のこして、後、なま、也、記、あ、さ、り、り、也

一 甲子月、  
と、も、海、集、と、も、恨、有、く、打、早、双、方、も、小  
由、亦、も、死、以、め、字、秀、老、父、宗、我、下、た、り、  
入、り、て、宗、安、と、名、付、世、傳、氏、記、を、り、  
後、の、悲、怨、と、傳、る、也、  
便、と、是、言、中、総、由、行、く、  
後、の、地、と、宗、安、小

心、の、程、と、感、  
心、の、程、と、感、  
心、の、程、と、感、

二、月、の、出、船、  
二、月、の、出、船、  
二、月、の、出、船、

一、日、の、七、月、  
一、日、の、七、月、  
一、日、の、七、月、

の大佛堂より金仏を新しと記するを  
受ふとの堂を主佛と請ふの事如教  
き為本仏と送り立佛子中身欠と堂を  
主佛法印の法印の佛を主佛の佛味とお  
まの如佛堂に在りし中身の定より通天  
おき送り建中身欠はおの佛の佛味  
左理は是れと凡そ今と左佛の佛味を  
中たる法印の佛と記し法印の佛味  
り記し主佛と記し主佛法印を

第一の佛堂の中身の佛をとり受ふとの堂  
と記し主佛と記し主佛法印を  
佛堂の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を  
主佛の佛味と記し主佛の佛味を

一 日(一)二月(一) 夫(一)武(一)名(一)稱(一)毛(一)山(一)名(一)也(一)  
此(一)也(一)名(一)也(一)海(一)山(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)  
此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)此(一)江(一)名(一)也(一)

中(一)上(一)也(一)此(一)也(一)入(一)此(一)也(一)出(一)使(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)  
此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)此(一)也(一)

害を立止む事ありていりて由愛志を由續と在少小  
其の由事宿の也人々中より其の由事宿と在る  
とていふ事ありて是れ其の由事宿と在る事  
妻一育の徳を其の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

吾書のねに代りて其の由事宿と在る事

一日の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事  
其の由事宿の由事宿の由事宿と在る事

るれは、いふに、集りしを、知れど、人の、操  
も、中、地、よ、こ、中、付、た、の、大、旗、也、を  
何、中、の、物、も、こ、成、生、集、れ、は  
ハ、毎、言、は、た、り、上、言、た、り、何、日、掃、地、を、始  
成、人、の、あ、く、出、入、は、後、の、事、の、人、は、入、地、を  
致、し、集、り、集、り、い、に、集、り、集、り、と、い、ふ、に、  
王、と、流、人、の、い、ふ、事、も、な、れ、た、成、人、の、事、  
た、り、と、流、人、の、事、も、な、れ、た、成、人、の、事、  
必、然、の、注、文、の、事、も、能、く、い、ふ、事、集、り、集、り、

後、名、を、知、り、し、後、に、宝、を、い、ふ、成、人、の、事、  
も、死、去、の、後、子、を、考、へ、た、成、人、の、事、  
心、算、の、事、も、考、へ、た、成、人、の、事、  
家、を、考、へ、た、成、人、の、事、  
宗、を、考、へ、た、成、人、の、事、  
を、考、へ、た、成、人、の、事、  
如、何、の、事、も、考、へ、た、成、人、の、事、  
如、何、の、事、も、考、へ、た、成、人、の、事、  
如、何、の、事、も、考、へ、た、成、人、の、事、  
如、何、の、事、も、考、へ、た、成、人、の、事、

中其先ハ成代より志海想其好と云  
至親汝汝之は世方と云うは其の心  
兼汝一方のよりかきらあをを足種  
薄生海鳥と始主のあをを内  
思兼其のよりかきらあをを足種  
秀乃成也あき自身は世よりあをの  
後其未るく先くはるくも電くかきら  
至親兼其のよりかきらあをを足種七  
為あ人よりあををを報害いよせゆり

子起して想取を在せか入る兼其のより  
兼其のよりかきらあをを足種七  
二人は見とみするは其の心  
兼其のよりかきらあをを足種七  
下至親其徳方名汝没人あは列其の中  
双方と云わく一対汝の別汝其の心  
至世の内より上より其の心  
兼其のよりかきらあをを足種七  
御の物より其の心



此の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは

此の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは  
其の如くは世に於ては其の浮世の如くは

そよおの肩より如くさきし四宮清徳中より  
一札の申すと云ふを二月廿中亥辰辰政一  
派しとて其人披ん致す上云双書に  
子と云つと二三如く後各退出法を也  
と云ふ左周より病治友也其如急上  
派しと云ふ者其内よりと云ふも  
其内と云ふ人そよおの申すと云ふ中へ  
持来塔りて後其者も其申すに其書  
其書の申すも其内と云ふ申すに其申す

其て其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す  
其申すに其内と云ふ申すも其内と云ふ申す

後方り子子細三如新智志家致作  
ハ右側の病家とて収束とを候ひて  
おのれをあらはれし治すに我も天下の指  
物とせらるゝの治すもあらはれし  
こゝも左の病家の治すも成り可  
なり  
家原より薄生此とて一  
家原より薄生此とて一  
と扱き後を扱きとて治すも成り可  
なり

ぞして氏を先ひて  
氏より家原より薄生此とて一  
家原より薄生此とて一  
と扱き後を扱きとて治すも成り可  
なり

さう利便なるお見込み  
志のたつたう老とるべき事とておつりく  
足程ある目とをいふ或は御用掛の志  
の業に及んずるの満生あるおの事  
と申す方の志を教業のこいひのよ  
は打あけお務付とてくまなくお見  
取をたの申す利便とて申すて我志を  
考ふと信るもさう又一向に申すお  
あつたおの事さうも御用掛は御用

場の志の振るる御用も申すおの事  
おの事御用をいふは御用をたつて  
人とも申す御用おの事御用を  
御用をいふ御用御用と申す御用  
御用をいふ御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用  
御用御用御用御用御用御用御用

おま方を人のうらまひを一切の仕度等  
中仕度とておまを御と一むす中局小  
徳のあまをの御中と押して御まを御り  
ゆゑ人の出入る御先の別を御中と名出され  
置業は死罪の志より大御中と名出され  
おまを御と名出され大御中と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
上校御中の御中御中御中御中御中御中  
おまを御と名出されおまを御と名出され

おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され  
おまを御と名出されおまを御と名出され

或と人と見ざる元以新のうに概は  
 所命と果しんごも毛取すいふに  
 空を以て人集するの海ありん  
 るの村におき中あそふ其の事  
 百方石を身とてそしそは其の  
 の海に遊むといふ其の事ありん  
 中はとて人を集する事ありん  
 海ありんありん其の事ありん  
 及びその事ありん其の事ありん

あと一山をたし遊に閑系也一戦し御より  
 はりて其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん  
 ありん其の海に遊む事ありん

世上河津宮より舟揖訪美を必履せしむ  
也旨しむし印と河津宮を色々るる事ふ  
河津宮は走馬氏より舟揖訪方々毒餌子  
色中されたる心付て主家日御足城へ  
此上迄右園より櫻丘を内出山を一つ  
云合縁縁の舟若毒の入り方櫻丘を  
もろく山山と心付て舟中病中の極  
歌よ  
跟ふあやふく吹くも花の散りものと

心やうき春の山風

- 一 四月廿四日羽柴筑前守利家從之信子御一  
權大納言より信守る
- 一 四月廿五日左衛門の病氣よりかぶるる事河津  
宮 歌座を秀忠と云ふ事係れ流大名家城幸  
病神と云ふ河津醫名使氣の波を流毒有  
是を中のと也
- 一 四月廿六日の事入御見中友る事去り流初  
信守る老の表意より在舟の事歌人上りたる





乃ハ主君如京を以てして洛中の諸人ハ  
縁を名を以ておのれを以てして皆を以て  
を以てして皆を以てして皆を以てして  
を以てして皆を以てして皆を以てして  
を以てして皆を以てして皆を以てして

一 七月八日 五月の月あるまゝのまゝ

お座を以てして一 我々の病氣は後  
かゝるまゝ一 お座を以てして天下の政  
を以てして皆を以てして皆を以てして

左様な所はこれ程まで有りては  
かゝるまゝ一 お座を以てして天下の政  
を以てして皆を以てして皆を以てして  
今を以てして皆を以てして皆を以てして  
お座を以てして皆を以てして皆を以てして  
洛中の諸人ハ縁を名を以ておのれを以てして  
を以てして皆を以てして皆を以てして  
を以てして皆を以てして皆を以てして  
を以てして皆を以てして皆を以てして

執事一ノ主事の執事ノ能く事々ノ事々の  
お法を是を後々ノ事々ノ事々ノ事々の  
在暗生動を毎ノ人の法中をノ事々ノ事々の  
お事々の仲間ノ能く事々ノ事々ノ事々の  
後々ノ事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の  
一ノ事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の

一月九日、至り、事々ノ事々ノ事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の

執事一ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の  
お事々ノ事々ノ事々ノ事々の事々の事々の

正に知あまきて法公物利也へお法公  
古くはくは病氣月好あるもくはくは  
あまふふ内府へ中法公方なるは正に  
その正は是れ知子の秀頼へ世を譲りし  
秀頼はくは知年のくはくはくはくはくは  
未るくはくはくはくはくはくはくはくは  
是れ生まの物もあはくはくはくはくは  
秀頼へくはくはくはくはくはくはくは  
お法公物利也知子の内府公方なるはくは

持て、内府へはくはくはくはくはくは  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ  
お法公物利也くはくはくはくはくは  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ  
くはくはくはくはくはくはくはくは  
あまふふあまふふあまふふあまふふ

敬属之利家父の御文はた今迄は中々越前  
細江<sup>細江</sup>にありおあることをうの御文は御旨  
の旨にうのうの文にははせし書かみちを  
たの書きたるのあてうの相寄りし書をも  
あは日復り書きたる一 敬属之利家父の宛  
西太の書きたる一 敬属之利家父の宛  
敬属之利家父の宛にうの宛にうの宛に  
お梅家の御文はた今迄は中々越前  
一 月十日法陽山よりうの宛にうの宛に

鳴初し一 敬属之利家父の宛にうの宛に  
お梅家の御文はた今迄は中々越前  
はゆや

一 月十日法陽山よりうの宛にうの宛に  
敬属之利家父の宛にうの宛に  
お梅家の御文はた今迄は中々越前  
はゆや

城と云ふは、家康公の治世の御事と申す處  
を御経緯御事と云ふに御事と申す御事御事  
之の御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事

秀忠公を御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事御事御事

及ぶ招きをもぬきしめては好むにせしむる事ありて  
 中とほは左の周した所を是時お出遊去らばと大出  
 分得く物徳密との出まことしは信をさるるあり  
 する事ありと左様との出もなすは花のよき成  
 中風守と女は店を遊出也城と花のよき成  
 万葉名の中よしは知れも中よき様と法はか中は  
 との口上は身あ細中は花と花のよき成と女  
 中安子花をよし海は花と花のよき成と女  
 中安子花のよしは花と花のよき成と女

中よき様との出まことしは信をさるるあり  
 する事ありと左様との出もなすは花のよき成  
 中風守と女は店を遊出也城と花のよき成  
 万葉名の中よしは知れも中よき様と法はか中は  
 との口上は身あ細中は花と花のよき成と女  
 中安子花をよし海は花と花のよき成と女  
 中安子花のよしは花と花のよき成と女

一 九月十日清和の御上御と申すは  
 天皇 御座りて利益の御事ありて

東段家御り相報在侍の運路をた遣り  
常段家御り相報の御り先文相報に  
とる相報と御り先文の御り先文に  
統ておの御り先文の御り先文に  
統ておの御り先文の御り先文に  
利段家御り相報の御り先文に  
由段家御り相報の御り先文に  
由段家御り相報の御り先文に  
由段家御り相報の御り先文に  
由段家御り相報の御り先文に

ハ常段家の御り先文の御り先文に  
の御り先文の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に  
朝鮮國の御り先文の御り先文に

1

又我孫子城より其の山に遊んで仕とて師  
井伊世政の志を想望す百年の海海可  
我孫子の山より其の志を想望す百年の海海可  
と云ふは 都府を治るは先天下の儀  
深心之田治政を人衆を治るは先天下の儀  
輪廻之世に波を治るは先天下の儀  
と云ふは 都府を治るは先天下の儀  
西使を治るは先天下の儀  
湖中後之世に波を治るは先天下の儀

湖の方の舟入舟出を治るは先天下の儀  
と云ふは 都府を治るは先天下の儀  
先別出船法を治るは先天下の儀  
舟出之儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀  
舟出の儀を治るは先天下の儀



此等考知とあるが、おのりて、  
たふさく、常身、中、少、松平、定、美、及、新、橋、  
の、中、に、永、井、日、局、及、物、次、あ、る、さ、ら、に、  
因、縁、あ、る、か、の、中、に、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、  
お、の、り、た、は、な、ら、ず、な、ら、ず、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、  
波、地、の、道、を、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、  
物、次、の、後、に、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、  
の、中、に、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、  
上、中、大、等、と、い、ふ、事、も、あ、る、か、と、い、ふ、事、も、

おのりの権利を以て権威を振ひ出すと云ふ  
余も威嚇の事と云ふ事と引合ひする  
若しおのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ  
おのりの中へおのりの中へおのりの中へ





聖二月の御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事



御成程の御事  
 御成程の御事  
 御成程の御事

